

お客様へ……この製品を使用される前に必ずお読みください。

この度は、弊社製品デモ版をダウンロードしていただきありがとうございます。

本ソフトウェアは、次の「使用許諾条項」に同意いただいた場合にのみ提供させていただきますので、本ソフトウェアを使用する前に「使用許諾条項」を必ずお読みください。

使用許諾条項

1. お客様は、本ソフトウェア(同封のプログラム及びマニュアルをいいます)を日本国内において同時に1台のコンピュータでのみ使用することができます。
2. お客様は、本ソフトウェア及びその複製物を譲渡、転貸その他の方法で第三者に使用させることができません。
3. お客様は、本ソフトウェアをバックアップの目的で1部のみ複製することができます。なお、お客様によって複製されたソフトウェアについても本契約が適用されます。
4. お客様は、本ソフトウェアを複製した場合、本ソフトウェアの著作権表示と同一の表示を当該複製物に表示することとします。
5. お客様は、本ソフトウェアの全部又は一部を逆アセンブル、逆コンパイラ等により解析することはできません。また、本ソフトウェアは全部又は一部を改変し他のソフトウェアに組み込むことはできません。
6. 本ソフトウェアは、その仕様について事前の通知なしに変更されることがあるものとします。
7. 弊社は、お客様が本契約に違反した場合は、本契約を終了させていただくことがあります。
8. お客様は、本ソフトウェア及びそれに含まれる技術を海外に持ち出し又は非居住者に提供する場合は、通商産業大臣の輸出許可を取得するなど、関連法規に基づき適正な手続きをとるものとします。

株式会社 演算星組

目次

お客様へ	—	3
目次	—	4
ブログ	—	5
スタートアップ	—	6
製品内容		
必要なハードウェアとソフトウェア		
起動前の注意点		
Mac書道山水の起動	—	8
マック書道山水の基本操作	—	9
●マウスとタブレット		
各機能の説明	—	10
筆架	—	11
墨、硯、水滴	—	18
絵の具皿	—	19
和紙	—	20
見本帳	—	21
便利箱	—	22
印鑑	—	24
朱肉	—	26
文鎮	—	27
茶碗	—	32
ドローイングウィンドウ	—	33
プルダウンメニュー	—	34
色の解説	—	40
筆の解説	—	44
印の解説	—	46
墨、硯の解説	—	47
紙の解説	—	48
Mac書道山水テクニカル	—	50
Mac書道proで描く竹	—	56
筆のあとさき・色と文具	—	58

Macは「気」のメディア になった。

書画の技法の背後にあって、表現の原動力となり、かつまた表現を司るもの、それが「気」です。古人が「書は人の神通(何でもできる不思議な力)なり」と断じ、また「画は三品あり」として、最高の傑作を神品、それに次ぐものを妙品としながら、技術は巧みであるが気韻がない作を能品と呼び、一段低く評価したことから、書画の世界では「気」が重んじられてきたことが分かります。

そして「にじみ」「かすれ」「ぼかし」「肌理」などは、表現者の「気」が筆を回路として現出する時に起こるものとされてきました。言い換えれば、これらは決して運筆のテクニックなどではなく、魂の波動そのものであり、人間の小賢しい計算を超越したものなのです。こうした曖昧、漠然、朦朧、縹渺、カオス、ファジーとも呼べる世界が、コンピュータにはもっとも馴染まないとされてきたのも当然です。

Mac書道はこの通念に挑み、ペインティングツールとしてはじめて、「にじみ」「かすれ」「肌理」を機能として設定することに成功しました。それは単に表現の幅を広げるだけに留まらず、マウスを通じて「気」がモニター上に具現化することを意味します。つまりMac書道山水によってMacは、「気」を伝達する装置、すなわち「気」のメディアとなったのです。



製品内容

CD-ROM/マニュアル/登録はがき

必要なハードウェア と ソフトウェア

ハードウェア

13" カラーディスプレイ(640*480)以上、32000色以上表示可能な機種、PowerMac以降(G3推奨)

ソフトウェア

漢字TALK 7.55以上(8.5以上推奨)、アプリケーションメモリー16MB以上(20MB以上推奨)

筆圧感知タブレット

「Mac書道山水」はマウス操作を基本としてますが、筆圧感知タブレットにも対応しております。

対応メーカーはワコム、セイコー、カルコンプ製で、それ以外は未対応です。

起動前の注意点

※PowerMacintoshと漢字Talk 7.XXでご使用の場合。

起動時に、

「AppleScriptLib (またはObjectSupportLib、stdclib)がありませんので、アプリケーション "Mac書道山水1.0" は開くことができません。」

というメッセージが表示される場合があります。その場合には、ご使用のMacintoshに付属のシステムディスク内の「AppleScript」をインストールしてください。

または、下記のファイルを「システムフォルダ」の「機能拡張」フォルダへ入れてください。

「AppleScriptLib」「ObjectSupportLib」(これらのファイルは、システムディスクの「AppleScript J2-1.1」フォルダにあります。)

※動作が遅くなるので仮想記憶はOFFにしてご使用ください。

※Mac書道山水を起動して、大きなイメージサイズを開く場合には、多くのメモリを必要とします、必要に応じてアプリケーションメモリを設定してください。(20MB以上推奨)

※Mac書道山水のドローイングレスポンスはCPUパワーに依存します、より快適なドローイングレスポンスを得るには、クロック周波数の高い機種(G3)をご使用下さい。



アプリケーションメモリ

ハードディスクへのインストール

「Mac書道山水デモ Ver. 1.0」はインストーラ等は添付しておりません。最低限必要なファイルは「Mac書道山水デモ Ver. 1.0」と「Mac書道山水 Prefs」です。

Mac書道山水の起動

CD-ROMを挿入し、デスクトップ上で「Mac書道山水 デモVer. 1.0」のアイコンをダブルクリックします。
これでMac書道山水が起動します。

マウスとタブレット

この「Mac書道山水」は、墨と筆による表現をシュミレートしていますが実際のそれとは幾分異なった「Mac書道山水」ならではの感覚で表現されます。

●描画デバイスは「マウス」と「筆圧感知タブレット」がありますが、それぞれ特長があり、どちらが最適かは、好みにより分れると思います。

マウスの場合

●筆圧は、マウスボタンを押している時間に置き換ええました。

つまりマウスボタンの押しはじめは細く、時間がたつにつれて太くなります。

●マウスボタンを押したままの移動速度により線の濃さや、かすれ具合、太さが変化します。

(加速→薄くなる／減速→濃くなる／等速→一定)

●「はね」などの効果を表現するために、マウスボタンを離れた後も筆圧が0になるまで、わずかの間、筆は生きています。

筆圧感知タブレットの場合

●コードレスペンが筆圧を感知します。

●筆圧により線の太さが変化します。

●移動速度により線の濃さ(かすれ具合)が変化します。

(加速→薄くなる／減速→濃くなる／等速→一定)

文房四宝



画面左側に文房四宝アイテムが表示されます。基本的な設定はこのアイテムをクリックしてセレクトしたり、ダブルクリックしてサブツールパレットが開くことで始まります。

■文房四宝アイテムの移動

optionキーを押しながら、アイテムをドラッグすると、任意の位置に移動できます。

■文房四宝アイテムの整頓

プルダウンメニューの「文房四宝」で、画面四隅に文房四宝アイテムを整頓移動できます。

筆架

筆は合計四本置くことができます。
頻繁に使う筆を四本、筆架に割当ておきましょう。

■クリック

筆架に置かれている四種類の筆の選択。
(筆を選択すると、便利箱や、印鑑の選択は解除されます。)

■ダブルクリック

選択された筆の設定画面を表示します。



●筆架(ひっか)

筆を置くとき、支える用具。

筆を使ったあと、枕にして寝かせて置くものは
“筆床”ともいう。

衣桁にかけておくのを“筆格”ともいう。

筆の設定

「太さ」「筆形」「にじみ」「かすれ」「肌理」「色深」「筆圧」「はね」「筆跡」など、個々の設定ウインドウを表示することができます。

■全て表示

全ての設定ウインドウを表示します。

■基の筆の設定に戻す

初期の設定に戻します。

■筆選択

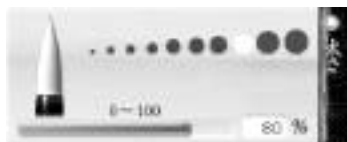
「筆の選択」ダイアログを表示します。



●筆選択ボタン



太さ



■スライダー

ドラッグすることで、筆の太さを選択できます。

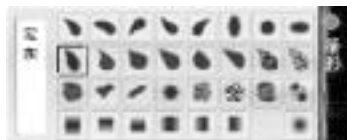
最小の筆は:太さ1、

最大の筆は:太さ100。

■黒●

50、60、70%など、おおまかに10段階の太さを選択できます。

筆形



起筆の形や機能をセレクトできます。

筆には大きく分けて、「主に線を描く筆」と「主に彩色する筆」とに分れます。

●彩色する筆

[連筆、彩色筆]

彩色用の筆なので「にじみ」「かすれ」などは作用しません。

●線を描く筆

[連筆、彩色筆]以外の形は「にじみ」「かすれ」「透明度」「起筆」「はね」など、すべてのパラメータが有効に作用します。

■楷書:中、楷書:左、楷書:下、楷書:上、楷書:右

没骨画や楷書文字を描くのに適した筆形です。
筆はこびにより起筆の形を使い分けてください。



■平筆：縦 / 横

描く方向により線の太さが変わります。

■雀頭

雀の頭のような、柔らかな線。

■定家、宗山妙超、道風、光悦、空海、王羲之、蕪村、鉄斎、
鉄舟、一休、無字、無準師範、雪舟、等伯
それぞれの作品から抽出した筆形。

[無字]での作例



■冥妙

描く方向により線の太さが変わります、梵字を書くのにも
敵しています。

[冥妙]での作例



■墨の雫

かすれた散毛筆で描いたような線。
墨を和紙の上に零したような表現もできます。

墨の雫



■連筆：横、連筆：縦

広い面を塗るのに敵した筆。
浮世絵に描かれる空のようなグラデーション表現がで
きます。



連筆：横



■彩色筆

輪郭のぼけた淡い線。

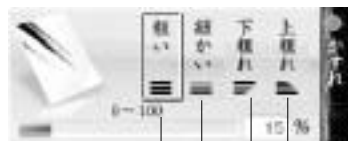




にじみ

■スライダー

ドラッグすることで、にじみ度が調節できます。



かすれ

■スライダー

ドラッグすることで、かすれ度が調節できます。

■細い、粗い、上かすれ、下かすれ

かすれの粗さを選択できます。

「かすれ」と「にじみ」の関係

にじみ(50)



にじみ(0)



かすれ(0) ----- かすれ(50)

肌理

「肌理」は線の乱れ度合いのことです。

■スライダー

ドラッグすることで、肌理度合いが調節できます。



色深

「色深」は色の深み(グラデーション)のことです。

- 縦色 縦方向の深み。
- 中色 内から外への深み。
- 混色 ランダムな深み。
- スライダー

ドラッグすることにより、深み度合いが調節できます。

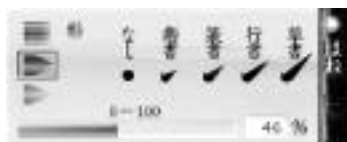


●スライダー値：0



●中色、スライダー値：80





はね

「はね」はマウスボタンを放した後のことです。
(マウスを使用した場合のみ有効)

■スライダー

ドラッグすることで、はねの遅延時間を設定できます。

- 草書 長い
- 行書 ↑
- 篆書 ↓
- 楷書 短い
- なし 遅延時間なし

おおまかにはねの遅延時間を選択できます。

形



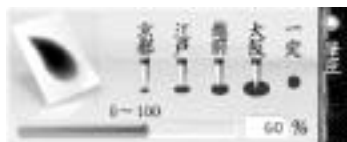
太さ変わらず、かすれが増大。



だんだん細くなる。



だんだん細くなり、かすれが増大。



筆圧

起筆時のにじむ速度が設定できます。
(マウスを使用した場合のみ有効)

■スライダー

ドラッグすることで、にじむ速度を設定できます。

- 京都 遅い
- 江戸 ↑
- 越前 ↓
- 大坂 速い
- 書き始め太さ一定

筆跡

筆の移動速度により、太さの変化量が設定できます。
(マウスを使用した場合のみ有効)

■スライダー

ドラッグすることで、太さの変化量を設定できます。



筆の選択ダイアログ

用途に応じた様々な筆を「書道」「水墨」「その他」の三つの
カテゴリーの中から選択できます。



墨、硯、水滴

墨

■クリック

墨を選択し、硯の上にマウスを移動し、クリックしたままマウスを上下に擦ると、硯の中の墨が濃くなります。

●墨床 (ぼくしょう)

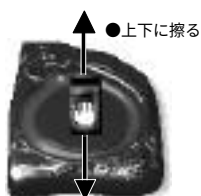
磨った墨をのせておく台。墨台、墨架ともいう。シンプルな台。

■ダブルクリック

「墨の設定」画面を表示します。

■「墨の設定」画面

お好みの色に合った墨を選択してください。



●墨の設定画面



●水滴 (すいてき)

硯に水を注ぐための器。取っ手のついたものを水注、匙で水を汲む形のものを水中丞という。

●水滴をクリック



水滴

■クリック

水滴を選択し、硯の上にマウスを移動し、硯の上にある水滴をクリックすると、硯の中の墨が薄くなります。

硯

■クリック

硯を選択すると、筆による描画は墨の色で行われます。

絵の具皿

絵の具皿は合計3個あります。
頻繁に使う色を3個の絵の具皿に割り当ておきましょう。



■クリック

3個中どれかを選択すると、筆による描画は絵の具皿の色で行われます。(硯の選択は解除されます)

■ダブルクリック

絵の具皿の色を選択するために「色の選択」画面を表示します。

※キーボードの[shift]キーを押しながら、絵の具皿をダブルクリックすると、「APPLE標準カラー選択ダイアログ」を表示します。

「色の選択」画面

■濃い

クリックした分だけ色が濃くなります。

■薄い

クリックした分だけ色が薄くなります。

■スライダー

ドラッグすることで、色の透明度が設定できます。

■ピッカー

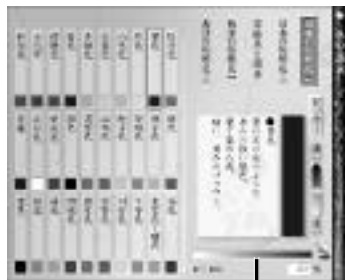
「色見本」以外の色を選択するために「APPLE標準カラー選択」ダイアログを表示します。

■OK

ドローイングウィンドウ上に戻り、選択した色を絵の具皿に表示します。

■キャンセル

選択した色がキャンセルされ、ドローイングウィンドウ上に戻ります。



●スライダー

和紙

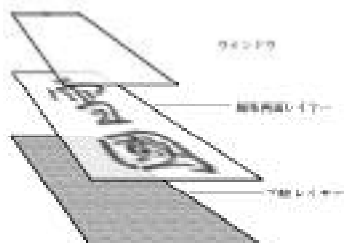
●和紙



「見本」と同じく、ドローイングウィンドウ下の下絵レイヤーです。どちらか一方が選択できます。

■ダブルクリック

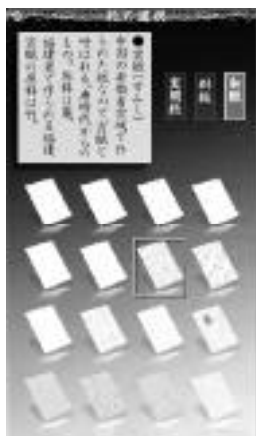
「台座」上の「和紙」をダブルクリックすると、「紙の選択」画面が表示されます。



「紙の選択」画面

「実用紙」カテゴリーの、最初の紙(左上の紙)が「白紙」で、紙がない状態と同じです。

希望の紙を選択してください。

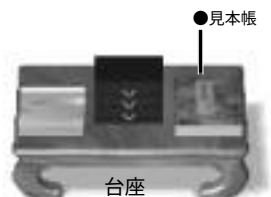


見本帳

「和紙」と同じく、ドローイングウィンドウ下の下絵レイヤーです。どちらか一方が選択できます。

■ダブルクリック

「台座」上の「見本帳」をダブルクリックすると、「見本帳」画面が表示されます。



「見本帳」画面

十二種類の基本点画を参照することが出来ます。

希望の基本点画を選択してください。

(基本点画は下絵レイヤーに表示されます。)

■プレイ

編集画面レイヤーに、アニメーション表示します。



■新規編集画面を開く

新規編集画面を開いて、基本点画を下絵レイヤーに表示します。

■下絵を開く

見本帳以外の外部ファイルを開くことができます。

「今の画面にフィット」

現在表示されているイメージサイズに合わせて、縦横比を変化させず、縮小／拡大して表示します。

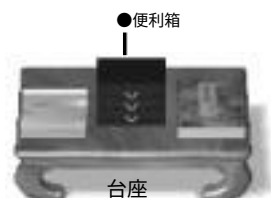
「もとの大きさのまま」

現在表示されているイメージサイズに関係なく表示します。

●下絵を開く



便利箱



「便利箱」は筆以外のツールセットです。

■ダブルクリック

「台座」上の「便利箱」をダブルクリックすると、「便利箱」画面が表示されます。

「便利箱」画面

(便利箱のツールを選択すると、筆や、印鑑の選択は解除されます。)

■セレクション

四角形の点線のエリア(選択範囲)の指定。
点線のエリアはコピー、ペースト、移動ができます。

■投げ縄

ドラッキングしたかたち通りの点線のエリア(選択範囲)の指定。
点線のエリアはコピー、ペースト、移動ができます。

■移動手

ドローイングウィンドウの表示エリアの移動(スクロール)。

■スポイト

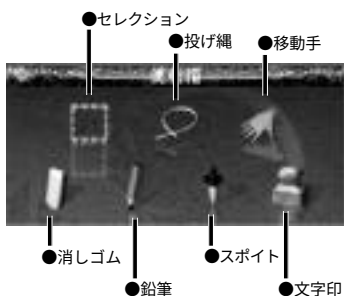
色を抽出し「絵の具皿」アイコンに表示します。

■消しゴム

「にじみ」「かすれ」のない白線。
「太さ」と「透明度」がスライダーで調節できます。

■鉛筆

「にじみ」「かすれ」のない線。
「太さ」と「透明度」がスライダーで調節できます。



●消しゴム／鉛筆を選択すると、ウィンドウが拡張し、太さ／透明度のスライダーが現れる。



■文字印

文字入力をして、印鑑のように押すことができます。
ダブルクリックをして、「文字の設定」画面を表示します。

「文字の設定」画面

■フォント

ポップアップメニューでフォントを指定。

■サイズ

サイズをキーボードから入力。

■スタイル

ポップアップメニューでスタイルを指定。

■文字入力

キーボードから印字したい文字を入力。

■行揃え

左詰め／センター／右詰め。

■実寸表示

実際に印字される文字の表示(プレビュー)。



印鑑



任意の場所に印鑑を押すことができます。
(朱肉をクリックしないと、朱肉の色で押すことができません。)

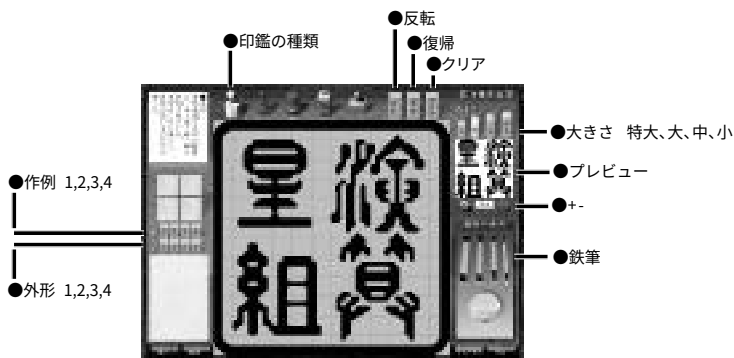
* 印鑑を選択すると、筆や、便利箱の選択は解除されます。

「印鑑」アイコンをダブルクリックすると「印鑑作成」ダイアログを表示します。

「印鑑作成」(篆刻) ダイアログ

好みの印鑑を作成してOKボタンをクリックすればウィンドウ上の任意の場所に印鑑を押すことができます。

「印鑑作成」(篆刻) ダイアログ



鉄筆、印刀(いんとう)

印刀は、書でいうと毛筆にあたるので篆刻では鉄筆という。

滑らないように紐や薄革を巻く。

■クリアー

エディター上の印鑑を消去する。

■復帰

エディター上の印鑑を修正前に戻す。

■反転

エディター上の印鑑を白黒反転する。

■作例 1,2,3,4

作例を表示する。

■外形 1,2,3,4

外形を表示する。

■大きさ 特大、大、中、小

印鑑の大きさの選択。

■+-

プレビューの表示倍率。

■印鑑の種類

印鑑アイコンのデザインが選択できます。

(機能に直接関係ありません。)

■鉄筆

四種類の太さの鉄筆が選択できます。

■開く

ディスクに保存されている既存の印鑑を開く。

■保存

作成した印鑑を保存する。

■OK

印鑑の作成を終りドロ잉ウインドウ上に戻ります。

■キャンセル

ドロ잉ウインドウ上に戻ります。

朱肉



印鑑を選択後、「朱肉」をクリックすると、「朱肉」の色で押すことができます。

何度も押していると、印鑑の色が薄くなりますので、その場合は再度「朱肉」をクリックしてください。

●何度も押していると、印鑑の色が薄くなる。



■ダブルクリック

「朱肉選択」画面を表示します。



「朱肉選択」画面

希望の色の朱肉を選択してください。

文鎮

「文鎮」は「筆書録」画面を表示するためのアイコンです。



■ダブルクリック

「筆書録」画面を表示します。

「筆書録」画面

筆のストロークとパラメータの記録／再生を行います。



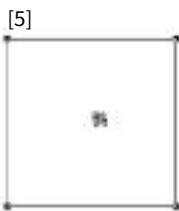
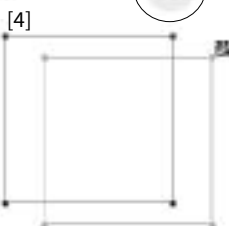
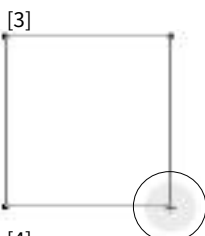
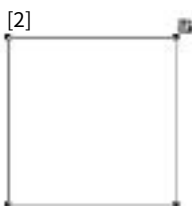
■筆録

筆のストロークとパラメータ(太さ、かすれ、にじみ、墨色、など)を記録します。

「筆録」をクリックして描画すると、「停止」をクリックするまで記録します。

■停止

「筆録」を停止します。



■再生

記録したストロークを最初から描画再生します。

(筆録されてない画像は削除されます。)

●「任意の位置」がチェックされている場合

- 1、「筆書録サブウィンドウ」の描画再生ボタンをクリックします。
- 2、カーソルをドローイングエリア移動し、描画再生したい位置の右上をクリックします。
- 3、描画再生サイズ縦横比を変更したい場合は、描画再生エリアの角をドラッグして変更します。
- 4、描画再生エリアの外をクリックすると、描画再生の位置が移動します。
- 5、描画再生エリア内をクリックすると、描画再生を開始します。

■筆戻

1ストローク手前迄を、最初から描画再生します。

■寸戻

1ポイント手前迄を、最初から描画再生します。

■寸行

1ポイント先を、描画再生します。

■筆行

1ストローク先を、描画再生します。

●描画再生時の条件設定

■高速

「筆録」時に記録されたスピードではなく高速に描画再生します。

■現在の筆

ストロークを再生時に現在設定されている筆(形、色、太さ、にじみ、かすれ、など)で描画します。

■任意の位置

任意の位置と大きさとで描画再生します。

●筆書録ファイルの読み／書き。

■開く

筆書録ファイルを読み込みます。

■保存…

「筆録」したストロークの内容を筆書録ファイルとして保存します。



■QT出力

「筆録」したストロークの内容をQuickTimeファイルとして保存します。

クリックすると「出力モード設定」画面を表示します。

●出力モード設定

■テンポ設定

再生速度の設定。

※通常は「リアルタイム」を設定してください。

■スケール

縮小サイズで出力する場合。

※編集画面が大きいと、正しく保存出来ない場合があります。

特に640*480以上の場合は、縮小してください。



■OK

「圧縮設定」画面を表示します。

■キャンセル

QuickTime出力をキャンセルします。



●圧縮設定

■圧縮プログラム:コーデック

圧縮方法を選びます。

通常、シネパックを使うとベストな圧縮結果が得られます。圧縮なしを選択すると、品質を落とさずに保存できますが、ファイルサイズが大きくなりますので、注意が必要です。

■圧縮プログラム:色数

ムービーの色深度を選びます。

■品質スライダー

フレームの品質比率をコントロールします。

通常、シネパックの場合中位でベストな結果が得られます。

■動作:フレーム/秒

筆書禄ファイルの分解能は最大1/30秒です。

通常は1/30秒に設定してください。

■動作:基準フレーム単位

ムービーに基準フレームを挿入する頻度を設定します。

通常は15から30に設定してください。

■動作:データレートの制限

アクセススピードの遅い媒体(CD-ROMなど)から再生する場合に、データレートの制限を設ける必要があります。

通常は200から300に設定してください。

■OK

描画再生しながら、QuickTime出力します。

■キャンセル

QuickTime出力をキャンセルします。

ストロークの削除

■全部削除

●編集画面をすべて消去

プルダウンメニューの「編集」から「編集画面をすべて消去」を選択する。

●セレクトバー

shiftキーを押しながら、セレクトバーを右から左に移動して全部セレクトした後に、deleteキーを押す。

■部分削除

●セレクトバー

shiftキーを押しながら、セレクトバーを移動して削除したい部分をセレクトした後に、deleteキーを押す。



●
セ
レ
ク
ト
バ
ー

茶碗



筆休み

「茶碗」アイコンをクリックすると筆休みモードに変わります。季節によって変化する茶室、風景をお楽しみください。一服し終えたらクリックします。

ドローイングウィンドウ(編集画面)

移動

タイトルバーをドラッグするとウィンドウが移動します。

拡大／縮小

キーボードの[Option]キーを押しながら、マウスでウィンドウの右下をドラッグすると、ウィンドウが拡大／縮小します。



スクロール

便利箱の「移動手」を選択して、画面をドラッグすると、スクロールします。

閉じる

左上の図クローズボックスをクリックすると、現在開いているウィンドウが閉じます。

プルダウンメニュー

アップルメニュー

■マック書道山水について…

コピーライト、バージョンナンバー、などを表示します。



ファイル

ファイル管理、プリントアウト、終了等プログラムの基本動作コマンドが収納されています。

■新規作成…

新規のイメージを作成します。

●編集サイズの設定ダイアログ

●横幅、高さ

テキストボックスに入力することで、自由にイメージサイズを設定できます。

単位はcm(センチ)、inch(インチ)、pixel(画面の点の数)です。

●プリセット

プリセットされたイメージサイズを選択できます。

●画像解像度

解像度単位は、dpi と dpcm。

dpi はドット パーインチの略で、1 インチ (2.54センチ) あたりの点の数。

dpcm は、1センチあたりの点の数。

●色の数

イメージの色数「32000色」「1600万色」を選択できます。

■開く…

ディスクに保存されている既存のファイル*を開く。

■閉じる

現在開いているイメージを閉じる。

■保存

現在開いているイメージをファイル*としてディスクに保存する。

■別の名前で保存…

現在開いているイメージを新規のファイル名でディスクに保存する。

[保存形式] ポップアップメニューで保存形式を変更できます。保存形式には、ColorPict、TIFFの二種類があります。

■下絵と合成して書き出し…

「下絵」や「用紙」が設定されている場合、合成して保存します。

■用紙設定…

用紙サイズ、縮小／拡大率、方向、などプリント時の細かな設定を行います。

■プリント…

現在開いているイメージをプリントします。

■終了

開いているすべてのイメージを閉じた後に作業を終了します。

※Mac書道proのファイル形式はColorPictとTIFFです。
Mac書道proで作られたグイメーは数多くのアプリケーションソフトウェアで御利用いただけると共に、既存のColorPictやTIFFファイルをマック書道Proで利用することができます。

編集

ドローイングされたグラフィックスを編集するコマンドが
収納されています。

■取り消し

一回前のアクションを取り消す。さらにもう一度<取り消
し>して復帰することも可能です。

■カット

「セレクション」「投げ縄」等で囲んだ選択範囲をカットして
クリップボード上に記憶する。

■コピー

「セレクション」「投げ縄」等で囲んだ選択範囲をコピーし
てクリップボード上に記憶する。

■ペースト

カット、コピーでクリップボード上に記憶したイメージを画
面中央に張り付ける。

■消去

「セレクション」「投げ縄」等で囲んだセレクトエリアを消去
する。

■すべてを選択

ウィンドウ上のすべてを選択範囲にする。

■編集画面をすべて消去

ウィンドウ上をすべて消去する。

■環境設定

環境設定ダイアログを表示。

編集	画面	表示	文房四宝
やりなおし			Alt
カット			Ctrl
コピー			Ctrl
ペースト			Ctrl
消去			Del
すべてを選択			Ctrl
編集画面をすべて消去			Ctrl
環境設定			Alt

●環境設定ダイアログ

バックグラウンドのカラー及びパターン、硯のデザインを設定します。

●ピッカー

「APPLE標準カラー選択」ダイアログを表示します。

●グラデボタン

◎上から下へのグラデーション。

◎下から上へのグラデーション。

◎フラットカラー。

以上、三種類の表示方法の切り替え。

●バックパターン

パターンの選択。

●硯の選択

硯のデザインの選択。

(機能に直接関係ありません。)



●グラデボタン

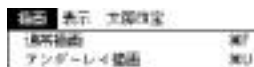
描画

■通常描画

上に重ね塗りができます。

■アンダーレイ描画

下に重ね塗りができます。(筆の色より明るい部分だけ、色が塗られる。)



通常描画



アンダーレイ描画



表示

■表示倍率

編集画面を拡大／縮小表示します。

■情報表示…

現在表示されているイメージの横幅、高さ、色の数を表示します。

■俯瞰画像表示…

イメージ全体を表示します。

俯瞰画像内の長方形のエリアをマウスでドラッグすることによって編集画面の表示エリアを移動することができます。

スライダーをドラッグすることで、表示倍率が変わります。

■表示切り替え

現在表示されているイメージの「編集画面」と「下絵」の表示切り替えをします。

選択されるごとに、「編集画面」と「下絵」、「編集画面」のみ、「下絵」のみ、の順番で切り替わります。

■編集画面を表示

これにチェックマークがついていると、「編集画面」が表示されていることになります。

■下絵を表示

これにチェックマークがついていると、「下絵」が表示されていることになります。

■編集画面を下絵にする

「編集画面」に描かれているイメージを「下絵」のレイヤーに転送します。



■下絵を編集画面にする

「下絵」に描かれているイメージを「編集画面」のレイヤーに転送します。

文房四宝

■整列：左

バックの文房四宝が画面の左隅に整列します。

■整列：右

バックの文房四宝が画面の右隅に整列します。

■整列：上

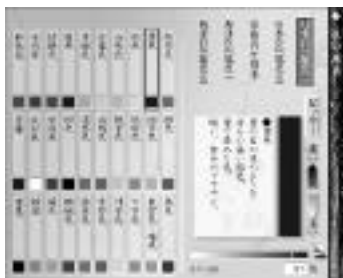
バックの文房四宝が画面の上中央に整列します。

■整列：下

バックの文房四宝が画面の下中央に整列します。

文房四宝	
整列：左	画L
整列：右	画R
整列：上	画T
整列：下	画B

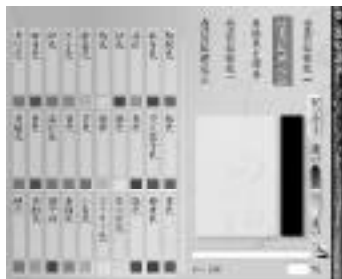
色の解説



日本の伝統色 1

- 牡丹色 (ぼたんいろ)：牡丹の花びらの重なりのような、さえた赤紫。藍と紅花による。
- 緋色 (ひいろ)：目のさめるような鮮やかな糸や布の赤。茜で染めた、黄みのある赤。
- 茜色 (あかねいろ)：茜染めの濃い赤。額田王は「あかねさす紫野行き……」で朝日を表した。
- 栗色：栗の実の皮のような赤みの強い褐色。栗で染めた色。暗い、黄みのブラウン。
- 撫子色 (なでしこいろ)：撫子の花のピンク。うすい赤紫。英名のピンクはナデシコ科植物の総称。
- 東雲色・曙色 (しのめ・あけぼのいろ)：明け方の光の色。明るい黄赤、黄みのピンク。茜色の名より新しい。
- 肌色：橙(だいだい)色のごくうすい色。じっさいの皮膚の色より明るい。膚色。
- 琥珀色 (こはくいろ)：琥珀は地質時代の樹脂が化石になった鉱物。胎色よりも黄みがかった色。
- 丁字色 (ちやうじいろ)：丁字の木、つぼみを煎じた汁で染めた黄みのある茶。「源氏物語」にもある染色。
- 山吹色：黄色の色名として最初に使われたもの。旧暦の春は梅で始まり、山吹で終わった。
- 梔子色・支子色：梔子の実で染めた濃い黄。梔子の花は白いが、その色素は黄色い。
- 刈安色 (かりやすいろ)：刈安で染めた、緑がかった黄。刈安は、ススキに似たイネ科の多年草。
- 若葉色：草木の新芽の色。明るい黄みのある緑。「みどり」は「みずみずしさ」を表す。
- 山鳩色 (やまばといろ)：ほとんど灰色に近い黄緑。青白橡(つるばみ)と同じ。灰みのオリーブグリーン。
- 常磐色 (とこわいろ)：松や杉など、常磐樹の葉のような濃く深い緑。変わることのない緑。千歳緑。
- 青磁色 (せいじいろ)：青磁のような、くすんだ、やわらかい青みの緑。青竹色や若竹色にも近い。
- 浅葱色 (あさぎいろ)：うすい葱(ねぎ)の葉の色。藍染めの、ごく浅く染めた、鮮やかな緑みの青。

- 露草色：露草の青い汁を、衣にすりつけて染めた青。月草色とも呼ばれる。
- 藍色：藍を深く染めた、くすんだ青。藍染めには、瓶覗・浅葱・縹・藍・紺がある。
- 紺色：藍染めのごく濃い色。藍染めの専門業を紺屋といった。英名はネイビーブルー
- 瑠璃色 (るりいろ)：瑠璃のような紫みの青。瑠璃は七宝の一つで、仏教美術でも珍重された。
- 桔梗色 (ききょういろ)：桔梗の花のような、鮮やかな、さえた青紫。重色よりも青みが濃い。
- 藤色：藤の花のような、くすんだ、うすい青紫。平安時代から様々な絵画文学に現われる。
- 紫苑色 (しおんいろ)：紫苑の花のような、くすんだ青紫。王朝文学にはあでやかな色として描かれる。
- 古代紫：草紫の根で染めた紫。彩度の高い今の紫に対し、昔のにぶい色の紫を古代紫と呼ぶ。
- 灰白色 (かいはくしよく)：灰色がかった白。黄みの白。英語では牡蛎の色で、オイスターホワイト。真珠色。
- 銀鼠 (ぎんねず)：銀色をおびた鼠色。明るい、白に近い灰色。英名はシルバークレー。
- 利休鼠 (りきゅうねず)：緑みの灰色。利休色(緑みに黄)に鼠。茶人利休にちなんだ抹茶の緑。
- 黒橡(くろつるばみ)：暗い事象を象徴的に表した黒。冬、北の方位、黒衣など。ツルバミはクヌギ。
- 墨色：書画に用いる墨の色。唐墨は青みを、和墨は茶みを持つ。すべての色が集約される。

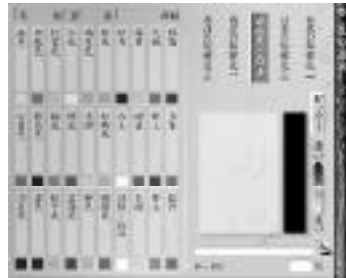


日本の伝統色 2

- 駱駝色 (らくだいいろ)：ラクダの毛のような茶色。英名はキャメルで、タバコの名まえにもある。
- 胎色 (あめいろ)：水胎やベッコウ胎のような、てかてかとしたオレンジ色。英名はキャラメル。
- 雀色 (すずめいろ)：雀の羽のような茶色。雀頭色とも書く。夕暮れ時のことを雀色時ともいう。

- 蘇芳色(すおういろ)：スオウの樹からとれる染料の赤。奈良時代からのくすんだ紫みの赤。
- 空五倍子色(うつぶしいろ)：ヌルデの枝に出来る五倍子(ふし)を染料にした、うす黒い灰黄色。
- 檜皮色(ひわだいろ)：ヒノキの樹皮のような暗い赤茶色。樹皮色(きはだいろ)ともいう。
- 鳶色(とびいろ)：鳶の羽のような灰みの茶色。江戸時代の代表的な茶系の色のひとつ。
- 鉄色(てついろ)：鉄のような暗い青緑。英語のスチール・グレーは鋼鉄のような灰色。
- 錆色(さびいろ)：鉄などが錆びた色。暗くくすんだ黄赤。侘び寂(わびさび)の寂の黄。
- 練色(ねりいろ)：白絹を練って、のりをとり淡い黄色にしたもの。練糸のような黄みの白。
- 菜の花色(なのはいろ)：アブラナの花のような明るい緑みの黄。菜種色ともいう。
- 鴛色(ときいろ)：トキが飛ぶときの風切羽のピンク。朱鷺色、時色とも書く。
- 雄黄(ゆうおう)：硫化砒物の雄黄は砒素を主成分としたもの。顔料に使われる。赤みの黄。
- カナリア色：カナリアの羽のような明るい黄色。カナリー・イエロー。
- 鬱金色(うこんいろ)：ウコンの根からとれる染料の黄色。英名はターメリック。カレーの色。
- 苔色(こけいろ)：苔の色のようにくすんだ緑色。英名はモス・グリーン。中国では苔緑。
- 小麦色(こむぎいろ)：小麦の種子のようなオレンジ色。日焼けした肌の色の形容に使われる。
- 芥子色(からしいろ)：芥子のようにくすんだ黄。芥子はカラシナの種を粉末にしたもの。
- 鶯色(うぐいすいろ)：ウグイスの羽のようにくすんだ黄緑。ウグイスの背の茶色は鶯茶という。
- 亜麻色(あまいろ)：亜麻糸のような明るい灰みの茶色。アマは古くからある繊維の原料。
- 砂色(すないろ)：砂のような、灰色がかった黄。英名はサンド・サハラという色名もある。
- 海松色(みるいろ)：ミルのような灰っぽい黄緑。ミルは食用にもされる海草。
- 茄子紺(なすこん)：ナスの実のような紺色。暗い紫。英名はエッグプラント。
- 群青色(ぐんじょういろ)：アズライトを原料とした岩絵具の青。もとはラピスラズリの青をいった。
- 堇色(すみれいろ)：スミレの花のような青紫。万葉集から少女マンガにまで使われる。
- 竜胆色(りんどういろ)：リンドウの花のような明るい青紫。リンドウの根は漢方薬になる。

- 青竹色(あおたけいろ)：竹の色のような青みの緑色。若竹色、老竹色もあり、竹の緑も変化する。
- 黄蘗色(はじいろ)：ハジの樹からとれる染料の黄赤。黄蘗紅葉(はじもみじ)は紅葉のハジ。
- 鈍色(にびいろ)：濃いねずみ色。喪服の色とされ、平安時代からの色名。にぶいろともいう。



顔料、四季《顔料・12色》

- 臙脂(えんじ)：コチニールという虫から取った染料による濃い赤。紫みの艶やかな赤。
- 真朱(しんしゅ)：硫化水銀から取られた朱色で、黄みの赤。辰砂(しんしゃ)。万葉集で「まほそ」。
- 鉛丹(えんたん)：酸化鉛の、明るい赤橙色の顔料。奈良の寺院建築の丹塗りに也使われた。
- 代赭(たいしや)：赤鉄鉱を粉末にした、くすんだ黄赤の顔料。日本画で土、樹木、肌などに使う褐色。
- 紫土(しど)：酸化第二鉄を主成分とした顔料。暗い黄みの赤。ベンガラ色。弁柄、紅殻とも書く。
- 黄土：酸化鉄を含んだ赤土から作られた顔料。くすんだ赤みの黄。代赭の原料。
- 藤黄(しおう)：オトギリソウ科の常緑樹の樹脂から作った顔料。雌黄(しおう)。日本画の黄。
- 緑青(ろくしょう)：銅の表面の緑色の錆。絵画、建築の代表的な緑色絵具。昔は孔雀石の粉末。
- 白緑(びやくろく)：緑青を細かい粉末にすると乱反射して、白っぽい緑色になる。淡い緑。
- 紺青(こんじょう)：藍銅鉱(アズライト)から取る顔料。さえた紫みの濃い青。染色のブルー。
- 白土(はくど)：土質の石灰岩で、太古からの白色顔料。壁や陶器の上塗りにも使われる。
- 胡粉・鉛白(こふん・えんぱく)：白い顔料。鉛白は鉛に酢を作用させた塩基性炭酸鉛。胡粉は貝殻の粉末。
- 《四季の色・春6色、夏3色、秋6色、冬3色》
- 桃色：桃の花のような、くすんだ赤。古くは桃染めの色のことで、万葉集にもある。

- 紅梅色**：紅梅の花のような、やや紫みの、濃いピンク。英名はローズ・ピンク。
- 躑躅色**(つつじいろ)：躑躅の花のような、紫みの赤。枕草紙で清少納言は冬の色の筆頭にあげる。
- 萌葱色**(もえぎいろ)：草木の芽が出たばかりのときの色。さえた黄緑。萌黄、萌木とも書かれる。
- 浅緑**：うすい緑色。くすんだ黄みの緑。万葉集、古今集では、春の柳の表現に使われる。
- 柳色**：柳の葉のような、くすんだ黄緑。襲の色目には、柳、青柳、黄柳がある。
- 水色**：澄んだ水のような、うすい青。うすい緑みの青。平安時代からある色名。
- 縹色**(はなだいろ)：藍染めの、浅葱と藍の中間の濃さの青。深縹、中縹、次縹、浅縹がある。
- 菖蒲色**(あやめいろ)：アヤメやショウブの花のような、華やかな、青みの紫。しょうぶいろとも読む。
- 朽葉色**(くちばいろ)：落ち葉のような、くすんだ赤みの黄。平安朝にも愛好された茶色。
- 柿色**：柿の実のような黄赤。照柿という名のオレンジ色の染めのこと。柿渋色のことも。
- 柑子色**(こうじいろ)：柑子の実のような、明るい黄赤。橙色よりやや黄みのオレンジ。蜜柑色。
- 胡桃色**(くるみいろ)：胡桃の樹皮から取った染料の褐色。天平時代には写経用の染紙に用いた。
- 葡萄色**(えびいろ)：山葡萄の熟した実のような、赤みの紫。源氏、枕草子も。海老色とも使われる。
- 濃色**(こきいろ)：濃い紫。平安時代、色といえば紫であって、濃い色とは紫の濃いものだった。
- 枯野・枯色**：草や木が枯れたような、くすんだうすい黄褐色。枯草色ともいう。
- 松葉色**：松の葉のような、濃い黄緑。古くは深緑の名として用いる。門松など吉事の緑。
- 消炭色**：消炭のような、暗い灰色。黒に近いグレー。英名はチャコール・グレー。



西洋の伝統色 1

- ベビー・ピンク**：ベビー服として男子にはベビー・ブルー、女の子にはベビー・ピンクを着せた。
- スカーレット**：緋色と訳されるが、茜ではなく臙脂(えんじ)の染料と同じ。鮮やかな黄みの赤。
- カーマイン**：エンジ虫のコニールの染料による赤。しかし臙脂色ではなく、真紅。
- クリムスン**：カーマインと同じ語源の赤、カーマインよりいくぶん紫みのある赤をさす。
- マホガニー**：マホガニーの木材(堅い家具材)のような、茶にちかい、暗い赤。
- クローム・オレンジ**：クロームはギリシャ語で皮膚の色。19世紀に金属製のクローム顔料が発見される。
- エクリュ・ページュ**：微妙な、うすい茶。未加工、未漂白、未染色の布を表す用語だった。
- バート・シエンナ**：伊のシェーナでは美しい赤褐色の土がとれる。それが色名になった。赤みの茶。
- ラセツ**：ラセツは赤褐色一般をさす語。朽葉色と訳されるが、もっと赤みがある。
- アイヴォリー**：象牙色。象の牙だけではなく、他の動物の角や牙もアイヴォリーと呼ばれた。
- クリーム**：クリームのような、淡い黄。仏だとクレーム、伊だとクレマ、クリーム色。
- クローム・イエロー**：黄色絵具は19世紀初めに登場して人気に。ベックリン、ゴッホなどが愛用した。
- オリヴ**：オリヴの実のような、暗い緑みの黄。オリヴ・グリーンなど。
- レモン・イエロー**：レモンの実のような、やや緑みの黄。クローム・イエローの緑を含んでいる。
- グラス・グリーン**：草の緑を表す。標準の色はなく、草原の色をシンボライズしたような色名。
- ウィロー・グリーン**：柳の葉のような、黄みの緑。日本の柳色よりも黄みが強く、くすんでいる。
- クローム・グリーン**：この絵具の登場で、西洋画の草木の表現が鮮かになった。明・中・暗3段階ある。
- スカイ・ブルー**：晴れた空の青。空色。スカイ・カラーにはアザー、セレスト、ゼニスなどがある。
- ターコイズ・ブルー**：ターコイズはトルコ石で、緑と青の中間の色。青いものがターコイズ・ブルー。
- ピーコック**：孔雀の羽のような、濃い緑。青よりのものがピーコック・ブルー。
- バイス**：ルネサンス期の顔料。最上の青とされていたが、いまはくすんだ、緑みの青。
- コバルト・ブルー**：コバルトアルミン酸塩の顔料による青。絵具、インクなどの鮮かな青の典型。
- ウルトラマリン**：ラピス・ラズリ(瑠璃)を原料とした青い顔料。鮮かな紫みの青。群青に近い。

- ラベンダー：ラベンダーの花のような、青みの紫。水浴のときに使われたの香水の原料。
- モーヴ／マロウ：アニリンから取った染料による青みの紫。モーヴは葵(あおい)のこと。
- パープル：古代地中海でのホネガイなどの、赤紫の染料。ヴァイオレットより古い色名。
- マゼンタ：最も赤に近い鮮かな紫。印刷インクの三原色のひとつ。マゼンタ。
- シルヴァー：銀色。シルヴァー・グレイ、シルヴァー・ホワイトも銀色の別名。
- パール・グレー：真珠の色のような灰色。パール・ホワイトの名がパール・グレーとなった。
- ミスト：紫みの灰色がミスト(霧くもや)の色)で、青みの灰色がフオグ(霧の色)



西洋の伝統色 2

- ロータス・ピンク：蓮(はす)の花の色のようなピンク。蓮は夏に、白、薄紅色の花を開く。
- オーキッド：蘭(らん)の花の色のような薄い紫。蘭には約二万種あり、色もさまざま。
- ストロベリー：イチゴの実のような鮮やかな赤。莓色(いちごいろ)はやや紫みの赤。
- フクシャ・パープル：フクシャの花の色のような赤紫。合成染料で、中国語の品紅(びんほん)。
- ローズ：バラの花のような鮮やかな赤。ローズ・レッド。薔薇色。
- ポピー・レッド：ヒナゲシの花の色のような強い赤。ケシは虞美人草、コクリコともいう。
- ワイン・レッド：赤ワインのような濃い赤紫。ボルドーなど、色名になっているワインも多い。
- アガット：珊瑚(めのう)のような赤みのオレンジ。アガットは珊瑚のこと。珊瑚色。
- ファイア・レッド：火の色。焚き火の色、火山の色。炎の色をいうフレイムもある。

- シナモン：香辛料のシナモンの茶色。シナモンは古代エジプト時代からのハーブ。肉桂色。
- コービー・ブラウン：コービーの豆のような黄みの茶色。コービー色。中国では珈琲色。
- ココア：ココアのような暗い赤茶。ココア色。チョコレート色はもう少し濃い。
- ヘンナ：ヘンナはミソハギ科の灌木で、その葉から赤茶色の染料がとれる。
- トープ：モグラのような暗い茶みの灰色。トープはフランス語でモグラのこと。
- カーキ：カーキはカーキ色、黄褐色。ヒンズー語で土の意で、軍服の色として普及した。
- メイズ：トウモロコシの実のような浅いオレンジ。玉蜀黍色(とうもろこしいろ)。
- ダンディライアン：タンポポの花のような明るい黄色。蒲公英色(たんぽぽいろ)。
- アップル・グリーン：青リンゴの実の黄緑。青リンゴは古代ローマ時代からのもので、地中海的な色。
- ミント・グリーン：ミントの葉のような明るい緑色。ミントはハッカのこと。薄荷緑。
- エヴァー・グリーン：モミノキなどの常緑樹の緑。日本では常磐緑、千歳緑。中国では冬緑。
- ジェード・グリーン：翡翠(ひすい)のような明るい緑色。ジェードは翡翠のこと。翡翠色。
- マラカイト・グリーン：マラカイトの深い緑色。マラカイトは孔雀石のこと。古代からの顔料でもある。
- ダック・ブルー：鴨の羽の色。マガモの羽のような緑みの青。ティール・グリーンはコガモの色。
- シアン：鮮やかな緑みの青。マゼンタ・イエロー・シアンを三原色という。
- ラベンダー：ラベンダーの花の色のような青紫。ラヴェンダーは香料や香水の原料にする。
- バイオレット：スミレの花の色ような紫。パンジーよりも淡く、パープルよりも青みがある。
- スレート・グレー：石板のような青灰色。スレートとは屋根瓦などに使う薄い粘板岩。石板色。
- ミルク・ホワイト：ミルクのような白。乳白色。ミルク色。10世紀から使われている色名のひとつ。

筆の解説

筆の解説

●羊毛筆：中国産の羊毛は江南の山羊だといわれる。

毛質はとても柔軟で弾力があり、墨をよく含む。

●馬毛筆：腰が強く、長い毛が取れるので、大筆に用いられる。

尻尾から取れる毛(尾脇)は、毛先が鋭く弾力にも富む。

●山馬毛筆：山馬(さんば)という馬はなく、トナカイか大鹿だともいう。

鹿の毛よりも太く、剛毛だけれど粘りがある。大筆用。

●兎毛筆：古代から鹿毛と共に使われていたが、現在は使われなくなった。

野兎の背筋に生えている黒い毛を紫毛といい、写巻に使われた。

●狸毛筆：毛の先端は弾力があって強く、根元は細く弱い。薄黄色の柔らかいものを白狸といい、上質の仮名用筆となる。

●鹿毛筆：柔毛だが羊毛よりも少し硬く、弾力性、柔軟性は少し劣る。

洗ったとき墨が落ちやすいので、画筆に向いている。

●玉毛筆：猫の毛。細くてきつ先がよくきき、腰が強く纏まりがいい。

細い線が描けるので、仮名書、版下用、蒔絵筆に使われる。

●イタチ毛筆：赤褐色で、毛は細く、きつ先がよくきき、粘りがある。

長い毛は取れず、仮名用、細字用に使われる。

●テン毛筆：毛はイタチよりも太く、縮れている。尾の部分が良い。

長い毛が取れるので、仮名だけではなく中字用にもできる。

●リス毛筆：細くて柔らかいが、弾力が乏しく少しべたつく。

毛は美しく、化粧用の筆などにも使われる。

●ムササビ毛筆：ムササビは野鈴(のぶすま)ともいわれる。毛先は柔らかく腰は硬い。他毛と混ぜて小筆に使われる。

●狼毛筆：中国北部の野鼠の一種から取った毛が、狼毛と呼ばれた。

冬毛は毛先が鋭く腰も強い。中字や画筆用。

●狐毛筆：剛柔の中間ぐらいの硬さで、3センチぐらいしか取れない。

小字用で、特に仮名書に適している。

●猿毛筆：細くて柔らかいが、縮れが多く、端正な文字には向かない。

ユニークな書線を出せる筆として使うことが出来る。

●熊毛筆：熊の毛は、猪の毛と似て、針金のような感じで纏まらない。

しかし猪よりも柔らかく、羊毛と混ぜて使うと面白い。

●豚毛筆：太くて硬く、纏まりも悪いので単独では使われない。

油絵用は殆どが豚毛で、刷毛材料としては欠かせない。

●犬毛筆：犬の種類によって、剛柔さまざま。

愛犬のヘアークットをしたときに、筆を作るといい。

●人髪毛筆：胎髪といい、出生後に初めて刈った頭髪で、それを使う。

柔らかく粘りがあり、各人ひとつとして同じものはない。

●キジ毛筆：ふつうは白キジの頸部が使われる。

曲がったり、細くなったり、意表を衝いた線質を得られる。

●竹筆：竹の先を細かく割って槌で叩き、ほぐしたもの。

穂先は柔らかくして、毛筆のように尖らせて削る。

●むくげ筆：筆先に行くほど細く削り、根を糸で縛り、松脂で固める。

それをシュロの木の皮で加工する。王陽明が考案した。

●ひのき筆：檜(ひのき)の皮の柔らかい部分を、薄く削いだもの。

鉛筆のように削って使い、感触はサインペンのように。

●木筆：ぼん字などを書くのに用いた筆で、柳の木がよいといわれる。

これの刷毛状のものは空海の飛白書などに使われた。

●藁筆：藁をそのまま、柔らかくして束ね、軸にすげれば使える。

毛筆の限界を越えた大字を書くときに作られる。

●正倉院の筆：正倉院には天平筆17本と宝物筆と呼ばれる大筆1本がある。

黄金、白銀、牙頭、紫檀などの筆で、筆管、筆帽の装飾が綺麗だ。

●空海の筆：唐より帰朝した空海は、筆工の坂名井清川に製筆法を伝授し、

嵯峨天皇に献上する狸毛筆を作らせた。日本の書道を革新した。

●小野道風の筆：道風の時代には、兎、狸よりも鹿毛筆が多く使われた。

仮名や調体の文字に、柔軟で尖った線も書ける鹿毛が好まれた。

●藤原定家の筆：定家の書はオタマジャクシの如く、しかも内に強い力を蔵するといわれる。

筆圧の強弱の激しい晩年の書を定家流という。

●本阿弥光悦の筆：光悦の鷹ヶ峰の芸術村には、筆工の妙喜がいて光悦の筆を作った。

角倉素庵との「嵯峨本」は続け字の活字を使った美麗な印刷本。

●富岡鉄斎の筆：明治には筆匠による筆メーカーが現われ、鉄斎の筆の大半は京都・金翠堂によって作られた。鉄斎は詩画一致の世界を描いた。

●尊円親王の筆：尊円の「入木抄」には、細かく手習いの心得が書かれている。

筆は、料紙には兎毛、ただの紙には鹿毛など。どう使うか。

●貫名すう翁の筆：すう翁は荅菱湖、市河米庵とともに幕末の三筆のひとり。

すう翁はいつも鹿の夏毛長鋒を使い、柳条と名づけた北京筆を用た。

●市河米庵の筆：米庵は「墨場必携」の最初の編著者としても知られる江戸の書家。中国筆 700 余点を蒐集し「蔵筆譜」を著した。画期的文房具家。

穂の形、長さによる分類

●超長鋒筆：穂の太い部分の直径に 6 を掛けたもの。

鋒が特別に長い。

●長鋒筆：穂の太い部分の直径に 5 を掛けたもの。見た目、ふつうより穂の長いものは長鋒といえる。

●中鋒筆：穂の太い部分の直径に 4 を掛けたもの。

ふつうの長さの筆。

●短鋒筆：穂の太い部分の直径が、中鋒以下のもの。見た目、

ふつうより穂の短いものは短鋒といえる。

●超短鋒筆：鋒の長さが特に短いもの。雀頭筆(じゃくとうひつ)と呼ばれる、正倉院の天平筆など。



印の解説

印材(材料)

●玉印：古代中国では印の材質は、玉・金・銀・銅と区別されていた。

玉印はことに美しく、官位の高いものだけが使った。

●銅印：中国の印は秦漢代に入ってその形式が確立した。

印のほとんどは銅製であり、高度な鑄銅技術があった。

●石印：宋元代に入ると、印材は石、水晶など多様になった。

石印材としては、寿山石、青田石、昌化石などがある。

●木印：木々の豊富な日本では、印材に柘(つげ)などの木を用いた。

どこにでもある柔軟な、さまざまな木が、身近な印材になる。

●陶印：陶を素材とした印。陶土で印材を作り、印面に陶刻し、うわぐすりをかけて焼きあげる。

形式・用途

●姓名印：私印のなかの代表。印の形式は多様で、字数などで形も変わる。

姓だけのもの、名だけのもの、姓名両方のものがある。

●字の印：昔、中国で加冠の礼を行なって、字(あざな)をつけた。

姓とは別なもの、筆名、雅号のようなものを付けても面白い。

●雅号印：号とは、姓名以外の呼び名のこと。自由につける呼び名。

ペンネーム、愛称、通称、敬称などなんでもいい。

●堂号印：堂号とは、斎、堂、館、閣などの楼閣につけた呼び名のこと。

他に、庵、房、亭、舍、居などがある。自宅にも別な呼び名を。

●成語印：吉語などを織り込んだ印で、姓名字を冠さない詞句印のこと。

長寿を願う千歳、長生。福寿を求める大吉昌などの吉語をつける。

●收藏印：書画、骨董、書籍などにつける收藏鑑賞印のこと。用途によって、鑑賞印、收藏印、保存印、取得印などがある。

●住所印：住所を示した印。いまでは最も実用的な印だが、かつては、

どんなのところに住んでいるかとか、趣や雰囲気を表した。

●干支印：干支は十干と十二支からなり、60年で一巡する。

年賀状などに使う、木火土金水の五行のシンボル。

(十干・十二子の6種)これはオプションとしてあっても面白いかもしれません。

●書簡印：手紙に、礼儀、誠意、尊敬など親しみを込めて表した印。

手紙のあとに姓名を書き、その下に何か一言を入れる。

●肖形印：図形、象形の印。図像のもの、絵のあるものをいう。

動物、植物、吉祥のシンボルなど。図像と姓名の組み合わせも。

●吉語印：おめでたい言葉の印。漢代では日利、大利、長幸などの語。

祝とか、寿とか、“おめでとう”とかの語でもよい。

●花押印：署押ともいい、承諾のしるしの署名から始まった。

日本では草名、花書とも呼ばれ、凝った意匠の署名印とした。

●田黄印：田王とは寿山で採れる最高の印材。彫りやすく崩れにくい。

これは獅子の彫紐(つまみの部分につけた彫刻)の美麗なもの。

●日本古印：日本で初めて印が使われたのは大宝元年(701)のこと。

中国の官印をまねた古銅印で、独特のくだけた字体である。

●糸印：小さな銅印で、動物紐のついたものなど変化に富んだ形がある。

もとの用途は不明で、足利時代頃から印として使われた。

●高麗印：青銅の鑄造印で、動物紐がついていて糸印と似ている。

高麗時代の後期、12世紀から14世紀にかけてのもの。

●宏覚禅師の落款印：鎌倉時代に、中国の文人の影響で、禅僧が印を使った。

宏覚禅師のものは、東岳という号を、岩山と太陽で表している。

●印判状の印：戦国時代は印の全盛期で、花押に代えてハンコを用いた。

北条氏の虎印が先例となり、動物の意匠のものが流行った。

墨の解説

●しゅう斯羽：明の墨匠、程君房と方う魯とが作った美しく繊細な墨。

しゅう羽とはイナゴのことで、「詩経」のなかの言葉。

●月精：程君房と方う魯の作といわれるファンタスティックな墨。

月の精はどこにいるのか。蛙が吹く炎が月の回りに飛んでいる。

●国宝墨：二頭の竜が彫りおこされた、精悍なデザインの墨。小判型でボリュームがあり、竜の躍動感が伝わってくる。

●龍徳：龍徳という文字の右上に龍の胴体があり、その龍は墨の側面

から裏面へと続き、下方のもう一頭の龍とにらみ合う。

●紫玉光：清の曹堯千の作の、梅の花のなかに紫玉光の文字のある、六角柱の墨。美しい名が好まれ種々のデザインのものがある。

●黄山松煙：松煙墨は、松材の煙煤を原料とした墨で中国初期からのもの。

黄山松煙はポピュラーな銘で種類も多い。



硯の解説

●風字硯 風の字に似せて作られた硯。これは端溪石を用いたもので、ひ翠紋と波状紋がある。端溪の石の紋様や班紋は変幻する風景のようだ。

●端溪蘭亭硯 端溪の石は中国広東省斧か山の溪谷で採れる。微妙な紫色で乾くと蒼、潤うとより美しい。蘭亭は王羲之の家での宴会の物語。

●荷葉硯 端溪石を用い、産出したときの石の形を活かし、荷葉(蓮の葉)の意匠にしている。へたの模様は石眼。手のひらに乗る大きさ。

●白端石硯 白端とは端溪の白石のこと。この白石は端溪の北の七星岩という名勝地で採れる。墨を擦る部分が日月を表す円形になっている。

●きゅう州竜尾鱗硯 きゅう州の石は中国安徽省の竜尾山で採れる。竜尾石と羅文石がある。これは竜尾石の硯。淡青黒で光沢があり、水を浸すと紫がかり細潤。

●松花江緑石硯 中国吉林省の松花江流域で採れる緑色の石。淡青緑の透けるような色。幻想的な風景が丁寧な線画で彫られていて、硯のなかに誘い込まれる。

紙の解説

●雲母(きら)まきの紙

麻紙による料紙。伝紀貫之の「高野切古今集」に使われた紙。現存の「高野切」は少し黄ばんでいるが、もとはもっと白かった。

●染紙(そめがみ)

奈良時代からある料紙。染めかたは、浸け染め、引き染め、漉き染めがある。奈良時代以来、写経料紙はすべて浸け染めだった。

●唐紙(からかみ)

平安時代に愛用された料紙。中国から来たので唐紙と呼ばれた。和製唐紙は「元永本古今集」などに使われた。多種の文様がある。

●香紙(こうし)

丁子(フトモモ科の木)で染めた料紙。写経料紙、かな料紙として用いられた。伝小大君「香紙切」は、「麗花集」を書写したものの。

●墨流し

平安時代に始まった料紙。「三十六人家集」のものが現存最古。墨流しの模様は、水の流れや風の吹くところに見立てられる。

●飛雲(とびくも)紙

雲のような形を白紙の上に、藍と紫の紙素でふわりと乗せたもの。平安朝のかな料紙独特のもの。濃い雲、淡い雲などさまざまな。

●半紙(はんし)

江戸時代、滑稽本や洒落本などの読本は半紙本と呼ばれた。ミツマタを原料とした駿河半紙が、現在の改良半紙のもと。

●画仙紙(がせんし)

画箋、雅箋とも書く。中国の宣紙に似せた、日本の書画用紙。宣紙も含めて画仙紙というが、中国には画仙と呼ばれる紙はない。

●宣紙(せんし)

中国の安徽省宣城で作られた紙なので、宣紙と呼ばれる。唐時代からのもの。原料は藁。福建省で作られる福建宣紙の原料は竹。

●鳥の子紙(とりのこがみ)

雁皮(がんぴ)を原料に漉いた紙。奈良時代には斐紙(ひし)といい経巻に、平安時代には厚様(あつよう)といい歌集の書写に用いた。

●楮紙(ちよし)

楮(こうそ)を原料とした紙。古くは写経用紙として用いられ、奉書紙、檀紙、障子紙、傘紙、記録紙など日常に広く使われる。

●竹紙(ちくし)

竹を原料として漉いた紙。中国では古来、盛んに作られた。繊維が粗く紙肌は密ではないが、独特に墨がにじみ味いがある。

●檀紙(だんし)

真弓紙。マコミを原料にしたともいわれるが、コウゾを漉いたもの。祝儀用紙や包装に用いる。紙面に美しい波形のある厚手の白い紙。

●雁皮紙(がんぴし)

ガンピ(じんちょうげ科の植物)の外皮を漉いた高級和紙。光沢があり絹のように薄く透けている。原料が少なく貴重なものの。

●奉書紙(ほうしょし)

執事または奉行などから下した文書を奉書といい、それに使われていた紙が奉書紙と呼ばれるようになった。典式用などの高級紙。

●斐紙(ひし)

雁皮(がんぴ)を原料とした紙で、厚手のものを厚斐紙、厚様、鳥の子といい、薄手のものを薄斐紙、薄様、雁皮紙という。

●杉原紙(すぎはらし)

奉書紙とならんで、古来慶弔用の紙として使われている。コウゾで漉いた上質のもの。播磨でおこり日本各地に広まった。

●麻紙(まし)

麻を原料とした紙で、紙としては最も古い歴史をもつ。紙質がよく、奈良時代の上質紙は麻紙だった。しなやかで強靱。

●羅紋紙(らもんし)

漉き染のとき、繊維がよじれ風紋が表れ、羅紋紙になったも

の。「筋切(すじぎれ)」や「石山切」などに残されている。

●宇陀紙(うだがみ)

阿波の吉野川流域の宇陀でとれたコウソを原料として漉いた紙。淡褐色の素朴で丈夫な紙で、表装の裏打に使われる。

●宿紙(しゆくし)

使用済みの紙を原料として、再び繊維にもとし漉き返した紙。脱色されず薄黒いところがあるものを、薄墨紙、水雲紙という。

●茶毘紙(だびし)

写経料紙で、麻紙に伽羅、白檀などの香木の粉末を漉き込んだ。香の粒子が点々として、茶毘に付した骨の灰のように見える。

●泉貨紙(せんかし)

天正年間、伊予の安楽寺の僧、泉貨が工夫したところからの紙名。コウソを原料とした粗く強靱な紙。袋紙などに使う。

●黄紙(きがみ)

天平時代、仏教の隆盛に伴い、膨大な数量の写経が行なわれた。そのため良質の用紙が量産された。黄紙はキハダで染めたもの。

●紅紙(こうし)

「正倉院文書」に表れる紙名は233種に及ぶという。紅紙は白紙、黄紙、赤紫紙などのように、色相名を紙名としたもの。

●高麗紙(こまのかみ)

平安時代に高麗(こうらい)から渡来した紙。きめが細かく、おちついた色に染めた優美な紙。消息や冊子の料紙に用いた。

●典具帖(てんぐじょう)

享禄年間の頃から漉きはじめられた、純コウソの非常に薄い紙。画家の透き写し用に、明治以降はタイプライターの原紙など。



「Mac 書道山水」テクニカル

始めに

「Mac書道山水」のテクニカルな部分(特にマウスを使用した場合)に少々光りを当てて見ましょう。

「Mac書道山水」上達の早道は次の二つについて、それ相応の努力と研鑽が必要です。一つは「Mac書道山水」に限ったことではありませんが、マウスを自由自在に扱えるようにすること。二つは「Mac書道山水」と実際の書道との違いを正しく把握することではないかと考えます。

言うまでもなく実際の書道でかなりの腕をお持ちの方でも「Mac書道山水」を使って、即座に立派な文字を書けるとは限りません。しかし「書」は元来芸術性をその本質に持っているものですから、実際の書道で培われた造形美が「Mac書道山水」にも生きてくることは当然と言えます。また芸術性あるいは美と言うものは、技術なしには表現できうるものではありませんし、書に限らず美の創造表現は常に技術の理解・体得と表裏の関係にあると言えます。

誤解のないように記しておきますが、「Mac書道山水」は決してただ綺麗な文字を書くためのソフトではありません。私達は改めて無味乾燥な習字(まさしく、字を習得する事)の時間にたち戻る必要はなく、ましてや従来からの習字の手本をそのまま取り入れた骨董的学習を必要としません。

余談ですが「書」が我々の実生活に根付かないのは、単に世の移り変わりだけの理由でなく、学校等で教える形骸的な教育による反動かも知れません。極論を言えば、書も絵画や音楽と同様にいろいろな精神美を表現する一分野なのですから、もっと自由な書的环境があっても良いのではないかと思います。

弘法はマウスを選ぶ

「弘法筆を選ばず」とは良く言われる諺ですが、それはそれぞれの筆なりに書くことができるというような意味でしょう。

唐の長安に学んだ空海(弘法大師)が、墨や筆の製法までも当時の日本に伝えた事は良く知られていることですし、小説とはいえ『曼陀羅の人』(陳舜臣著・TBSブリタニカ)にはその辺の事情が生々しく描かれています。どのような筆でも素晴らしい書を書いたであろう空海とて筆の大切さは否定するわけがありません。だからこそ、筆そのものの製法までも学んできたのでしょう。

さて、筆ならぬマウスで書を書こうとする私達はマウスの使用環境に十分な配慮が必要です。

第一にマウスによる作業範囲は思ったより広くとる必要があります。できるだけマウスパッドの回りには邪魔になるようなものを一切置かない位の配慮が欲しいものです。

第二にはマウスの状態を常にベストの状態にしておくことです。具体的にはマウスの掃除をこまめに実行してください。

空海●宝亀五年～承和二年(774～835)讃岐国(香川県)生まれ。姓は佐伯氏、幼名は真魚、延暦二十三年、第十四次遣唐使船にて入唐、大同元年帰朝の後密教の布教を展開。弘仁七年、高野山開創に着手し真言宗の開祖となる。嵯峨天皇、橘逸勢とともに三筆の一人に数えられる。弘法大師の諡号は死語賜ったもの。

筆法とは

永字八法



実際の書では、文字は「点」と「画(かく)」の組合せと考えられているところから、点画(てんかく)の形より練習する事が普通ようです。したがって「永字八法」即ち、「永」という字には八つの基本的な点画が含まれていると言うことでこの「永」という一文字を随分と練習された方も多いでしょう。しかしここでは数ある練習方法の一手段位に考えれば良いと思います。あまり規格に乗取った練習は自由な応用を妨げる事になるかも知れないからです。また始めから綺麗に書く事や、何かの手本通りに書くことだけを目標にする事は、書く楽しさを奪ってしまいかねません。

ここではマウスの練習を含めて基本的な練習をしてみます。くどい様ですが、始めから手本の通りにならないからと言って悲観してはいけません。これはあくまで基本の練習であって、書そのものは貴方の書いた文字の方がずっと魅力のあるものなのかも知れないからです。

それから「Mac書道山水」で大胆な英文字を書いてみるのも書の固定観念を撃ち破るのには最適の練習だと思しますのでお勧めしておきます。

しかし、まず文字の練習に入る前に図-1でご覧いただくようなパターンを練習してみる事を是非にもお勧めします。

「Mac書道山水」は紙も減りませんし墨で廻りを汚してしまう事もあるので、大胆なタッチで練習することです。これらの形がある程度、思うように書けないと十分な書はできません。

ここで理解していただけたと思いますが「Mac書道山水」の原理を簡単に説明すれば、筆の筆圧をマウスのボタンを押している時間に置き換えたものです。点を打ってからマウスのボタンを押したまま移動する時間が速ければ、それだけ線はかすれてきます。



さらに筆の太さにより違いがありますが、ボタンを離した後の移動により上手にマウスを動かすと跳ねの効果を表現することができます。したがって練習の要領としては次の二点に尽きるでしょう。

(1)マウスのボタンを押した後の時間および、マウスの移動量とそのスピードとの相関関係。

(2)マウスのボタンを離した後の時間および、マウスの移動量とそのスピードとの相関関係。

これらの練習を通じて「Mac書道山水」の要領とマウスの自在な使い方を会得していただきたいと思います。

図-2を見てください。これは点の打ち込みを起点とした筆の運びを表したもので、外側に向かう各々の線が筆運びの方法を示します。この例をおし進めた練習をするとなると図-3のような書法を練習することになります。まあ、何度か試してみると良いでしょう。

図-2

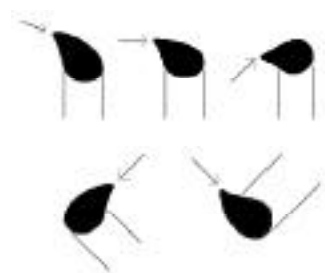


図-3



図一4



これらを練習する課程で、さらにいくつかの重要な点に気付かれるでしょう。

- ・筆運びの時は筆の形のカーソルを見ていてはダメで、実際に書かれている筆跡を追うこと。
- ・俗に言う早書きは「Mac書道山水」には向いていない。
- ・だからといってリズム感を忘れてはいけない。
- ・「Mac書道山水」独特の筆運びを会得した上で、図一4のような補正を加えた

書法を用いると形が整う(白い細線はこれらの筆運びを少しオーバーに表現したもの)。

さて、書の解説で「草書・行書」について触れない訳にはいきませんから少々記してみましよう。

楷・行・草はいずれも、文字を構成する「点」と「画」で構成されるわけですが、筆運びの動きが速くなると点画が連続したり、省略されたり、変形したりする傾向となります。したがって特に点画が連続する行書では「画」は「点の長いもの」、「点」は「画」の短いものと考えることができません。

行書・草書を書くときのアドバイスとしては、筆を細い筆にします。体験をすればすぐにわかる事ですが、筆が細くなればなる程に筆蹟の余韻時間が短くなります。したがって速い筆運びが可能ですが、跳ねを表現する場合にはそれ相応に速めの筆法が肝心です。

楷書では起筆の発動を収筆で受動しながら、それを繰り返すように運筆するわけですが(図一5)、行書では点画に連続性が強くなるため収筆の受動はそのまま次の画への発動となり、次の起筆もさらに受動がそのまま発動に作用していきます。

図一5



仕上げの大切さ

テクニカル編の締めくくりとして「Mac書道山水」で書いた書の扱いについて工夫の幾つかを記述します。
Macintoshならではの「書」の世界をお楽しみください。

(一)練習の課程とはいえ何かピンとくるものが仕上がったら直ちにセーブしておくことです。上記にも説明したとおり書は二度と同じものが書けないからです。

(二)思ったような書が書けたら、いつものプリンタ用紙ではなく和紙などにプリントしてみましょう。和紙によってはインクを少し吸収するため一段と書らしい仕上がりとなります。

(三)前記(二)に通じる事ですが、良いものができたら奮発して額にいれてみましょう。書や絵は額によって大きく雰囲気が変わり、時には額によって生きたり死んだりもするからです。こうして飾ってみると非常に良い出来だと気が付く事があるでしょう。

「Mac 書道山水」で描く竹



「Mac 書道テクニカル」で身についた技をいかし、ここでは水墨画風「竹」の絵に挑戦してみましょう。

(1) 太い竹幹から描き始める。



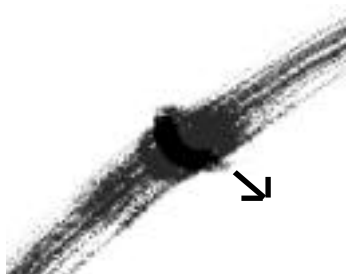
C 止めて、少し墨がにじんだ所でクリックボタンを離す。

B 等速でググッと運筆する。

A 墨のにじみきるちょっと手前まで筆を置く。

(2) 節を描く

・スッとひく感じで。

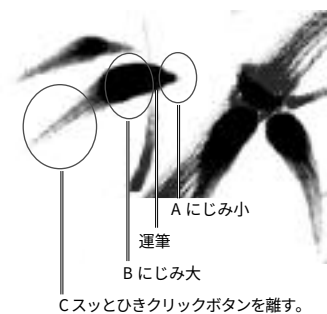


(3) 細い所を描く

・要領は(1)、(2)と同じです。



(4) 葉を描く



B のにじみの大きさ加減で太・細い葉を描きわけ
ます。

白緑

緑系の色相は自然の草木にあまたあるもので、どの葉からも緑色がえられそうな気がするが、その成分は葉緑素で染色性がなく、天然素材のなかで単独で緑色を呈するものは極めてまれで、日本では全く産出していない(吉岡常雄『日本の色』)。緑青の、銅に生じるさびの緑だといえればかなりやすいのだが、白緑というとふしぎな響きがある。白緑は緑青より少し白っぽく、淡い。白緑は奈良時代には寺院の仏像や仏画の彩色に重用された。平安時代の物語絵や四季絵の、バックの色や山の色などにも白緑は好んで使われている。青磁色は緑青よりはうすく、白緑よりはくすんでいる。

西脇順三郎の『旅人かへらず』に「東南に傾いた山青磁色の山々が地平に小さく並んでいる」とある。白緑は朝の感じ、青磁は夕方の感じがある。ペパーミントのアイスクリームにも白緑のものがある。稲垣足穂は『緑の蔭』で、「グリーン・グループ」と呼べる文学の作品群があるといっている。繊細で微妙で抽象的で中性的なものを、ただなんとなくそう呼ぶのだ。白っぽすぎてもいけないし、濃すぎてもいけない。英名はオパール・グリーン。

浅葱

浅葱色は、平安中期に浅黄の字をあてられたことから両者の色相が混同されたが、本来の浅黄は文字通り黄色であり、浅葱は青である。ネギ(葱)に因んだ色であるが、その染色は実物の葱より青味がちの浅い緑青色である(長崎盛輝『日本の伝統色彩』)。浅葱色は『宇津保物語』『枕草子』『源氏物語』など、平安文学によく見られる。

しかし浅葱の文字が使われるのは江戸時代からで、浅葱は浅缥(あさはなだ)の省略語らしい。缥(ひょう)は藍であり、紺である。缥の解釈を中国の古文から拾うと、「青白色の帛なり」(『説文』)、「缥は青なり」(『博雅』)、「缥は猶缥缥、浅青色なり」(『釈名』)、「缥は青黄色なり」(『広雅』釈器)、「乃春清缥酒」(曹植の『七啓』)、善いわく「缥は、緑色にして微白なり」などがある。かように色にはさまざまな見方がある。だがここで共通していることは、これらが藍に関係した色相をあらわしていることである(前田雨城『色』)。浅葱色を更にうすくしたものが水浅葱であり、藍染めによる水色を差す。藍はジーンズの色でもある。藍染めのブルーは、かめのぞき(瓶覗)、あさぎ(浅葱)、はなだ(缥)、あい(藍)、こん(紺)などと、順次濃くなるごとに呼び方も変わる。「日本へは、中国から朝鮮半島を経て蓼藍の栽培方法と染色技法が遅くとも奈良時代には移入され、正倉院裂にも藍で染められた遺品が数多くある」(吉岡常雄)。紙染めにも使用されていて、東大寺二月堂の『紺紙銀泥華嚴經(二月堂焼経)』のブルーは美しい。これは浅葱色といえるのではないか。江戸時代に火災にあって損傷し、まだらのブルーになっている。文字が銀色で書かれていることから別名プラチナ経とも呼ばれているが、銀と浅葱、プラチナとブルーはよく似合う。藍瓶にちょっと浸けただけの淡い藍を瓶覗といい、水色や水浅葱よりも更にうすいブルーである。覗き色とも呼ばれる。『色の手帖』(尚学図書編)によると、樋口一葉の『われから』に「集まりし人だけに瓶のぞきの手拭、それ、と切って分け給へば、一同手に手に打冠り」とあるという。

1961年、宇宙船ボストーク1号のガガーリンは「地球は青かった」と言った。そのメッセージを伝えているテレビも浅葱色だった。英名はブルー・ターコイズ。

参考文献: 吉岡常雄『日本の色』(紫紅社)／長崎盛輝『日本の傳統色彩』(京都書院)／尚学図書編『色の手帖』(小学館)／前田雨城『色・染と色彩・ものと人間の文化史38』(法政大学出版局)



筆架

筆を架ける。筆を置く。スリーブ。「筆は生き物であり、筆にも精があり、魂がある」(綾村坦園)。穂先を下にして、幾つもの筆が架かっているアーチ型の筆架は、まさに筆が家のなかで休息している姿をあらわしている。筆の家である。ずっと休んでいる筆もあるし、使ったばかりでまだ穂先に水気を含んだものもある。筆架のデザインは、中国の門であり家である。古い筆架はゴージャスで、竜と雲形をほどこした宮廷の模型のようだ。また筆架は、山水のなかの、険しい山の途中に建つ家のようにもある。筆架のまえに置かれた硯

や水滴や文鎮は、そのまま家の回りの岩や樹や池のミニチュアになって、机の上は筆架＝家を囲むジオラマとなる。筆架のアーチは門でもあり、また橋でもある。ぶらさがっている筆の穂先のすぐ下には、滔々と川が流れる。そして使われていない筆も、水の音を聴いて呼吸している。アーチ型之筆架貼「筆閣」「筆格」とも呼ばれる。箸置木型之「筆置機」も筆架出蟻、「筆床」「筆升」と呼ばれ、こちらは家に対して文字通り筆のベッド或は枕である。また、ペン皿状のものは「筆船」という。

箸置き型の筆架の形状は、山水画のディテールのように凄まじく美しく多様である。岩や雲や滝や樹の断片であり、机上の風景と実際の風景とを繋ぐ風水的な装置のようでもある。筆は休息して気を取り戻す。陶磁の筆架には「山字形」のものが多く、三山・五山の二種類にしばられる」(宇野雪村)。金属(銅、鉄など)、玉、石などからできた、雲、水、岩、竜、霊芝などの筆架は一見用途不明な不思議なオブジェである。自然の破片、地質学的風景の標本のようなものが面白い。堅い素材が柔らかな形を作り出す。穿たれ、振れ、溶けるように。水の流れや雲の動きは螺旋形の宇宙をあらわし、筆架を枕に横になり、垂直の筆は螺旋になる。水は石になり、石は水になる。水の侵食によって穴のあいた石が筆架としても珍重された。「世界中で最も柔らかなもの(水)が、世界中で最も堅いもの(岩石)を蹴ちらしてかけまわる」という老子の哲学が形象化されたものだからだ。

閑話休題。今、シャープペンや万年筆を胸のポケットに差している。ポケットは小型のアーチ型筆架であり、心臓の上のペンは、その鼓動を聴きながら眠っている。玉（白珪）で作られた竜を彫ったバックル（帯鉤）があって、それは漢代に作られたものだが清代になって筆架として代用された。フロントリングのような現代のバックルも筆架として使えそうだ。何でもない物体にも竜がひそんでいて、雲紋や流水紋のある筆の休息所を発見できる。空箱を丸めたもの、割れたコップ、取れた傘の柄、プラグ、貝殻、栓抜きなども筆架として使えそうだ。

参考文献：綾村坦園『文房四宝の基礎知識』（光村推古書院）／田淵実夫『筆・ものと人間の文化史30』（法政大学出版局）／宇野雪村『文房清玩上下』（平凡社）／P.ローソン＋L.レゲザ『タオ・イメージの博物誌9』（平凡社）

東雲色／曙色

夕焼けは遠ざかってゆくオレンジで、朝焼けは近づいてくるピンクだ。

東雲色／曙色は、明け方の東の空の色であり、あさい黄赤色である。

「曙色は江戸前期に流行した「曙染」の地名に由来するように思われるが定かでない。曙染は寛文（江戸前期1661～73）の頃、京で考案された模様染の一種で、この染色では裾の部分を三寸～五寸程白で残し、それより上の方を紅、紫、藍、鼠などで濃く量かしてゆき、裾の白い部分には必ず友禅模様が描かれる。量かしの部分の色彩は、もとは、その名の通り曙の空の色に染められたと

云われている。曙色はそこから出たのではないかと思われる。しかし、後には紫や鼠などで染められるようになった。この染色の名は西鶴の『好色二代男』（貞享元年・1684）に「曙染の裏を貝の口に紐合し…」と見えている。この染色が考案された寛文期は、明暦の江戸大火（明暦三年・1657）のため衣類が不足し、それを早急に補うために曙染のような模様の少ない色彩の美しい染色が流行した。曙染は後世、明治三十四～三十六年にかけて小付模様に流行しているが、曙色の名は見当たらない」（長崎盛輝『日本の伝統色彩』・京都書院）。

石川啄木が『葬列』に「十八歳で姿の好い女、曙色が浅緑の簡単な洋服を着て、面紗をかけて、音のしない様に綿を厚く入れた足袋を穿いて、・・」と書いたのは明治三十九年（1906）である。これは夢想的ウェイトレスの姿であった。

『源氏物語』の「橋姫」は、明け方の、色の分かれ目を書いた、あやしい、夢語りのな章である。琴と松風との音が交響するなかで、徐々に辺りの色づくのが描かれる。「明け方近くなりぬらんと思ふほどに、ありししのめ思ひ出でられて・・」「曙のやうやうものの色分かるに、げにやつしたまへると・・」。

『古今和歌集』には「しのめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるそかなしき」などがある。ほがらとは朗らかであり、明るくなる様子である。『枕草子』では「春はあけぼの、やうやう白くなりゆく、山際すこし明りて・・」であり、あけぼののぼのは、ほのぼのである。春はあけぼのといい、ほのぼのという今ふうでは暖かい感じだが、ほのぼのも、やはり明け方の意味である。ほのぼの色というものもあるのだろうか。

久野尚美の『カラーインスピレーション』講談

社)には「夜明けの空」のイメージカラーとして、ドーン・ミスト・ピンク(DawnMistPink)をあげている。「夜明けは復活を表し、バラ色の指を持つギリシア神話の曙の女神イオスで表される」という。この本で、「緑の光線」レヨン・ベール(Rayon Vert)が取り上げられていた。この二つは対になっているように思う。「緑の光線」はエリック・ロメールの映画のタイトルであって、ジュール・ヴェルヌの小説のタイトルでもある。緑の光線とは、緑閃光(GreenFlash)のことで、日の出・日没の時の水平線の太陽の光が、一瞬だけ緑色に見える現象である。映画では(小説でも)、それは日没のときの出来事であったが、日の出の、東雲色／曙色が緑の光線に変わるときはどんなだろう。

硯

天文写真を見るように硯の写真を見て、鉱物図鑑のように硯についての本を読む。ツルツルの石の表面で、風水と鉱物学とが出合っているようだ。

藤木正次編『硯の辞典』(秋山書店)で、石の種類や、石の紋様や色について読んだ。中国の古書に「硯」と「石」が、いかに深くきめ細かく書かれていたことか。杜甫や蘇東坡も硯についての詩を書いていた。石に夢中になって、青い花を探して山を彷徨っているような人が、昔の中国にはたくさんいた。

蘇東坡の『天石硯銘序』に「わたしが12のときに、友だちと土を掘っていたら、魚のような形の変った石が出てきた。表面はつやがあって、裏は細かい銀星紋様であった。扣いてみるといい音が

した。ために硯にしてみたら、とてもよく発墨した」とあった。趙希鵠の『洞天清緑集』には、「河緑石」という幻の石のことが出てくる。「その石は藍のような緑で、玉のように光っている。発墨は端溪の石にも劣らない。しかしその石は臨(甘肅省)の大河の深い水の底にあって、人力ではどうにも取ることができない。いまだにそれを見たことがない」とある。

端溪石に現れる石紋のひとつに「魚腦凍」がある。「生氣が、月の澄潭にただようがごときもの」(何伝瑤)、「四圍に火捺があって、中に脂のごとき白い量のあるもの」(李兆洛)である。魚の脳髓のように、白く透きとおった紋である。「魚腦碎凍紋」は魚脳が細かく砕け散り、白煙が立ちのぼっているように見えるものである。やはり端溪石に現れる石紋に「石眼」がある。人や動物の目に似ているのでそのように呼ばれている。岩石学的には、石眼は石蓮虫とよばれる棘皮動物の化石である。火山が爆発して噴出した灰が海底に沈んだときに、そこに棲息していた石蓮虫が化石となったものだ。さらにそれが長いあいだに化学的置換が行なわれ石眼になる。その形や色の相似から、珊瑚鳥眼、雄鳥眼、象眼、猫眼、怒眼、涙眼などの呼び名で分類されている。石眼のある硯は古来から珍重されていて、「たいいてい、石中に眼があるものをもって最貴とする」(唐詢『硯録』)などと言われている。

「青花」も端溪石に現れる石紋で、淡紫色の石面上に露星浮沈するブルーの微細な斑である。中国では「花」は「紋」を意味している。「青花は微細なること塵のごとく、隠々として浮出する。シラミの脚のごときものがよい」(屈大均『広東新語』)。ごく小さな青花は、水につけて日光に照らさないと見えないので、水に沈めて鑑賞する。青花は

その形状によって14種類に分類されるが、その名称がダリ風で面白い。微塵青花(細塵が鏡面に降りかかっているように見える青花)、鷺毛青花(鷺鳥のうぶ毛にたとえたもので、綿毛のような線状のものが浮動して見える青花)、雨霖檜青花(雨が間断なくザーザーと降っているように見える青花)、蟻脚青花(蟻の脚のような細い線状を呈した青花)、玫瑰紫青花(薔薇の実の断面を見るような、丸い形をした青花)、魚児隊青花(小さな魚が隊を組んで泳いでいるように見える青花)などである。

蘇東坡は硯や文房具を偏愛して、『端硯銘』『万石君羅文伝』などたくさんの文具論を著し、石の不思議を語った。カイヨワやバルトルシャイティスの先達であった。「筆落風雨疾(筆落ちて風雨のごとく疾し)」「文如翻水成(文は水を翻すが如くに成り)」は、どちらも蘇東坡の詩のなかの、凄いスピードで文章を書いたという意味の言葉だが、硯のなかの黒い水が嵐の海のように波打ち、反射する硯が、筆の加速をうながしているのが見えるようだ。

